

## 資料 2

### コンプライアンス（ハラスメント関係）について

全弓連は、セクシュアルハラスメント、パワーハラスメント、暴力行為等の防止を目的として、「倫理に関するガイドライン」を定めています。このガイドラインでは、セクシュアルハラスメントは「相手の意に反し、不快にさせるような性的な行動及び言動で、これにより、本連盟における相手の立場や、本連盟にかかる相手の活動環境を悪化させること」、パワーハラスメントは「地位・立場・職権等の優越を背景にして、相手に義務のないことを行わせたり、人格や尊厳を害したりするような言動で、これにより、本連盟における相手の立場や、本連盟にかかる相手の活動環境を悪化させること」、暴力行為は「相手の体に対する物理的な暴力のほか、脅迫的・威圧的・侮辱的な言動によって、相手を精神的・身体的に傷つける行為のすべて」とされています。

また、全弓連は、これらの行為を根絶すべく、「懲戒規程」で、「競技者及び指導対象者などに対して、暴行、暴言、いじめ、パワーハラスメント等を行うこと」、「指導に必要な範囲を明らかに超えた身体的接触、わいせつ行為、性的な言動、つきまとい行為、交際の強要等を行うこと」、「技量の向上とは明らかに無関係なしごきや罰としての特訓等の不合理な指導を行うこと」などを懲戒処分の対象と定めています。

このため、被害者からの通報などによって、これらの行為の疑いが生じた場合、その対象者については、相談窓口やコンプライアンス委員会による調査が実施され、これにより違反事実が認定された場合には、倫理委員会の審議、理事会の決議等を経て、厳しい懲戒処分が科されることとなります。実際、昨年には、これらの規程に基づいて、女性会員に対して暴力行為、セクハラ行為を行った男性会員が懲戒処分を受けるという事案も発生しています。

実際にどのような行為がセクシュアルハラスメント、パワーハラスメント、暴言等に該当するのかは、明確な基準があるわけでもなく判断が難しいというのは、一般にもよく指摘されることです。また、近時、「アンコンシャス・バイアス」と呼ばれる「無意識の偏見や思い込み」によって、自分では無意識のうちに誰かにストレスを与えるような言動をしてしまう危険性も指摘されています。

これらの難しさを克服して、これらの行為を根絶するためには、弓道関係者一人一人が、常日頃から、時代の変化に応じた問題意識を持ち、お互いの考え方等の違いを理解して認め合う多様性の感覚を磨くことが必要です。そして、自分の言動が、指導を受ける者や第三者にストレスを与えていないかに注意して行動するとともに、周囲の弓道関係者とも情報共有や議論を行うよう心掛け、仮に問題行動について他人から指摘を受けたときには真摯な気持ちでこれを受け止める心構えが重要です。

### 資料 3

#### コンプライアンス（矢羽関係）について

数年前、矢羽に使われるワシタカ類の羽根に密猟による鳥の羽が含まれていたのではないかと、弓道関係者がその取引に関わったのではないかなどが問題となり、全弓連は、準則の制定、調査委員会による調査、倫理委員会による処分などを通じてこの問題の解決に取り組みました。

このような行為が問題とされるのは、それが野生の動植物の保護を目的とするワシントン条約や種の保存法・鳥獣保護管理法などの国内法令に違反する可能性があるためです。つまり、この問題も、「法令順守（コンプライアンス）」の問題の一つの場面だということです。

そもそも法令を順守するのは一般社会人として当然のことですが、全弓連は、公益財団法人という公益性が強く求められる団体であることから、より一層コンプライアンスを重視する必要のある団体です。単に法律に違反していなければいいというだけではなく、社会的規範を順守することや、公正・適切な活動を通じて社会貢献を行うことが重視される存在といえます。

そして、団体としての全弓連がコンプライアンスを重視した活動を行うよう強く社会から求められているということは、その目的を実現するために、実際に全弓連を支えている弓道関係者一人一人が常にコンプライアンスを意識して行動すべきことが必要であることを意味しています。

また、この問題は、近時ますます重要性を高めている自然保護・環境保護の問題でもあります。全弓連は、鳥類の羽根、獣類の皮革、竹などを弓具に使用してきた弓道人の団体として、自然保護を第一と捉えた活動が求められています。この点も、実際に弓具を使用し購入する弓道関係者一人一人が強く意識して行動できるかどうかにかかっているといえます。

皆様には、平日頃から関連するようなニュース等に目を向けていただき、自然保護・環境保護に関する意識を高めていただくとともに、必要があれば、関連省庁のホームページなどで、この問題に関係する法令等についての理解を深めていただき、疑わしい取引には関与しないように注意する、疑わしい取引を見聞きした場合には周囲の弓道関係者に注意を喚起するなど、法令順守の意識を強く持って行動していただくことが重要となります。



## 公益法人について

全日本弓道連盟（以下全弓連）は、平成23年11月に公益の増進を図ることを目的として活動する、公益認定法に基づき認可された公益法人として新たなスタートをしました。

全弓連としてはコンプライアンス、ガバナンスとか、公正性、公平性、透明性などの言葉自体が重要なのではなく、その意味をしっかりと理解し、公益法人としての全弓連の活動とは何か、その指導者のあるべき姿はどういうものか、という共通理解、共通認識を持つことが必要です。そして、時代変化に応じた、社会的視野や長期的視野に立った、公益性を高める問題意識を持つことも重要といえます。

すなわち、全弓連の活動は弓道鍛錬を積み重ねていけば、それで公益活動に資するというものではありません。それでは、一般法人であったとしても同じことであり、公益法人としての社会的責任をどのように考えるのかということに関しては不十分です。

公益法人は、公共社会の利益を追求することの目的として、公益に寄与する、という活動を期待して特別に認可された団体です。その公益事業（審査・大会・講習会など）は全てが、社会的に公正、公平、透明と理解される活動を行う責任と使命があります。

公益法人としての公益事業は個人の利益となることや特定の人を遇することを行ってはなりません。公正、公平の観点から利害関係者があったり、利益相反となる行為については特に注意して行わなければなりません。これは組織の仕組みとして整えることが必要です。

また、広く一般の人々に対して活動内容を公開して、社会一般からの理解を得ることが必要です。

これは、弓道人および会員間の理解のみではなく、社会の一員として理解され、共感や納得を得られるよう努力しなければなりません。

これらの実現のために、公益法人としてはお互いの考え方の違いを理解して認め合う多様性の実現が大切であり、今の時代には最も必要な価値観であります。

公益法人の構成員は、各人がこれらの点をしっかりと認識し、公益という社会的存在としての社会貢献を強く意識して活動しなくてはなりません。

特に、範士等の称号の元に、公益法人が指導者と認定して称号を付与するということには、一般法人時代とは違い、特別に重い意味があります。

すなわち、公益法人である全弓連の中央委員は、弓道の技能知見の高さや、我が国の伝統武道である弓道の高い文化性を維持・継承しつつ普及・発展を意識することだけでなく、公益に寄与する観点から、高い倫理観のもと、人間としての社会的道義の認識を持つことを自覚しなければなりません。

## 資料5

### 公益財団法人全日本弓道連盟 自然・環境保護憲章の制定について

弓道は、弓に竹、弦に麻、矢にも竹と鳥の羽根と多くの自然素材を使用しており、特に矢に使用する鳥の羽根は、現在、他に代用するものが無い大切なものです。

これまでの矢羽問題の経緯と反省を踏まえ、我々は鳥の羽根を使用する団体として、改めて法令を遵守するとともに、今後一層、自然環境保護、特に鳥類の保護の重要性を強く認識いたします。

公益財団法人全日本弓道連盟は、ここに自然環境保護への新たな決意と基本的な姿勢を示すものとして、自然・環境保護憲章を制定いたしました。

#### 自然・環境保護憲章

公益財団法人全日本弓道連盟（以下「全弓連」という。）は、国際社会の一員である日本国における弓道に関する唯一の中央競技団体として、また、登録会員や加盟団体だけでなく日本国の社会や国民全体に対して責任を負う公益法人として、その果たすべき役割を改めて自覚し、これに相応しい責任ある活動をしてまいります。

全弓連は、国際的にも社会的にもますます重要性を高めている自然保護、環境保護・希少な野生動物保護などの重要性を強く認識し、これらを目的とした条約や法令を遵守することはもちろん、中央競技団体・公益法人としての社会的責任を十分に果たすことのできる団体を目指して活動してまいります。

全弓連は、弓道の普及振興を目的とするものであり、伝統文化の継承も重要な任務の一つと考えていますが、鳥類の羽根等を弓具に使用してきた弓道人の団体として、あくまでも自然・環境保護を第一と捉えて、そのために何ができるか何をすべきかを真摯に考え、自然保護団体等とも協力して活動してまいります。

全弓連は、これらの理念を実践すべく、法令はもちろん社会的責任も重視した厳格な自主的規範として、矢羽の使用に関する準則を策定しており、今後もこれを遵守し、時機に応じた見直しを行うとともに、その周知と遵守の徹底を求めてまいります。

令和3年11月25日

公益財団法人全日本弓道連盟